

撮影 大越千尋(写真部)

たなか・やすお=1956年、東京都生まれ。一橋大学在学中の80年、「なんとなく、クリスマス」で文藝賞を受賞。石油会社勤務を経て文筆活動へ。2000年から長野県知事を2期務め、07~12年に参議院議員、衆議院議員。

東京の女子大生・由利を主人公に、当時の世相や風俗を描いた『なんとなく、クリスマス』は、ミリオンセラーを記録。タイトルが流行語にもなった。本書『いまクリ』には『もとクリ』の三十三年後が描かれている。執筆のきっかけは？

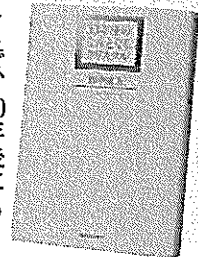
「五十回を迎える文藝賞の記念号で是非、と以前から編集者に言われていました。当時は永田町の住人で、物理的にも精神的にも難しかった。二年前の総選挙で敗退して時間的な余裕が生ま

書いたひと

田中康夫

ニッポン凄いぞ論でなく、微力だけど無力じゃないの心意気

「33年後のなんとなく、クリスマス」  
(河出書房新社 1600円)



れ、代表質問みたいな『論』ではないものを書きたいと」

物語は、愛犬ロッタと散歩中の、田中さん本人を思わせる語り手・ヤスオが、由利の友人とバツタリ再会するところから始まる。登場人物たちの「女子会」にヤスオも招待され、眺めの

いいリビングでランチを楽しみながら語り合う彼女たちの話に耳を傾ける。

「地に足がついていない」と上の世代から批判された彼女たちも、離婚や再婚、婦人科系の病気を経験し、夫や子どもとの間合いを考える五十代。その女子会の場ではバスタの味わ

いくことで、50年後にも1億人程度の安定的な人口構造を保持することができると昨年六月に「骨太の方針」を閣議決定してしま(苦笑)。量の拡大や維持でなく、質の充実へと認識を転換すべきなのにね」

五十四歳になった由利は会社を立ち上げ、子宮頸がんワクチンの啓発事業にかかわるが思い悩む。そして南アフリカの人たちに、不足している眼鏡を届ける社会貢献に力を注ぎ始める。

「でもね、夕焼けの名残は夜明け前の赤みと似ているでしょ。大昔は日没前も日の出前も、同じ『彼は誰(かわたれ)』時と呼んでいたのです。永遠の右肩下がりの歴史もない。だから、最近横行している空威張りの『ニッポン凄いぞ論』とは違う、微力だけど無力じゃない、出来る時に出来る事を出来る人が出来る場

語られるのです。あの意味ではそれが、しなやかな『女性的』な、勘性。古めかしい『男性的』な感性は、永遠の右肩下がりを信じて疑わな

い硬直した思考になり勝ち。だから、『2020年を目途にトレンドを変えて

「年間一千億円の年少扶養控除を廃止して財源を捻出した児童生徒向けの子宮頸がんワクチンは、重篤な副反応が今や社会問題化しています。一方、英国や米国では八割を超える成人女性の子宮頸がん検診が、日本では二割台。福祉や医

大西展子